
『メモリー』

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『メモリー』

【Nコード】

N4493C

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

宇津見斗馬は、中古品のデジタルカメラを買った。高級一眼レフの特価品だった。そのカメラを使って友達や風景などを撮影していたが、友人の一人が交通事故で死んだ。その後彼のデジタルカメラに異変が……ファインダーに出来た小さなシミが、いつの間にか死んだ友人の顔になったのだ。そしてある日友人は戻って来た。

【第1話】デジカメ（前書き）

できるだけ、間日（1日おき）定期で更新いたします

【第1話】デジカメ

斗馬はパソコンに差し込んだデジカメのメモリーカードに、ありったけの裕美子の画像を詰め込んだ。

パソコンから抜き取ったカードをデジタルカメラに戻すと電源を入れる。

液晶画面には次々と裕美子の姿がプレビュー機能によって映し出された。

* * *

その中古ショップは商店街の路地を入った何時も日陰になるような所に在った。中古ショップと言うよりは骨董品屋に近いかもしれない。

戸や窓が全て木枠の店構えは、その場所だけが昭和初期のまま取り残されたような不思議な面影があった。

元々はこの辺りに商店街など無かったらしい。駅が新しくなつて商店街が造られた時にもその店は、周囲の商店会から移転を進められたらしいが、店主はそれを頑なに拒んだのだそうだ。

赤錆の浮いた古い鉄の看板には『鉄風堂』と書いてあった。何やら昔は、鉄やその他の金属製品を主に扱っていたらしい。

もちろん、時代の流れか、今はプラスチック製品の方が多いが。それでも店の奥には今でも鉄の壺や何だか如何わしい西洋の甲冑なども飾つてある。

宇津見斗馬はめつたにその通りを歩く事は無かった。その日は、大学の帰りに同じ路地にある小さな古書店に立ち寄って、古い映画

のパンフレットなどを物色した。

行きの時には気付かなかった。いや、もしかしてその時にはまだ無かったのかもしれない。

帰り際に何となく見た鉄風堂のショーウィンドウには、高級デジタルカメラが置かれていた。

ショーウィンドウとは言っても、木枠のガラス窓に棚を設けただけの古びれた商ケースだ。

新品なら50万円以上する高級一眼レフのデジタルカメラが5万円を出ていた。それは、プライスカードの表示が間違っているとも思える値段だった。

陽射しは西へ傾き、その路地は完全に陽に陰っていた。

斗馬は直ぐに店に入って、店員を探した。

店内は照明器具が少ない為薄暗く、カビと錆の臭いがした。手製の棚にはCDプレーヤーから鍋釜まで無造作に並べてあった。

奥の方はなんだかごちゃごちゃして、店の広さは把握できない。天井からは何やらシャンデリアのような装飾品が吊るされている。

右側の奥にトラの剥製らしいモノが見えたが、それが本物かどうかは判らなかった。

ふと見ると、やけにデカイウォークマンを発見した。初期のカセットテープのタイプらしいが、どう見てもカセットの二倍以上はある大きさだった。

昔はこれを持ち歩いたのだろうか？

しかし、確かに見覚えのある書体でロゴが刻まれメーカー名も入っている。

「それは、一番初期のウォークマンじゃ」

店の奥から突然声がして、斗馬はビクリと身体を震わせながら振り返った。

小柄で色黒、白い顎鬚を伸ばしている初老の男が佇んでいる。

斗馬はウォークマンの話には興味を見せず、直ぐに用件を切り出した。

「ショーウィンドウのカメラはずいぶん安ですけど、ジャンクか何かですか？」

「ジャンク？」

店主は訝しげに言った。

「え、ええ。何処か壊れていて部品取り専用とか」

「何処も壊れとりやせんよ。寧ろそれ以上さ」

「それ以上？」

……状態良好ってことか。斗馬は勝手にそう判断した。

「あの……これからお金を持ってきますので取って置いて貰えませんか？」

「うちは取り置きはしない主義でね。純粹な早いもの勝ちさ」

斗馬は財布を取り出して中身を確認したが、自分の記憶通り札が1万2千円入っているだけだ。ジーンズのポケットに小銭が入っているが、足しにはならないので調べるまでもない。

「あの……カードは使えます？」

無理だろうと思いつながらも訊いてみた。

「うちは現金決済のみ」

店主はそう言って、微かにヒゲを揺らして笑った。

斗馬は急いで店を出ると自宅へ向った。

商店街を抜けて住宅街の路地に入ると100メートルほどで辿り着く。

しかし、いくら寂れた店でもあの値段を見つけた客はきっと即買いくするだろう。

見た目にも新品同様だったし、機能も良好で5万円は、東京中のショップを探しても二度と見つかる気はしない。

確かこの前雑誌で見た相場は状態良好だと30万円はした。

斗馬はそんな事を考えると、益々焦りが出た。しかし、ふと途中にある銀行に目が止まった。

ここで現金を降ろそう。何も家まで戻る必要などないのだ。

彼は銀行に入るとATMで5万円を下ろし、再び鉄風堂へ向かつ

た。

アパートへ帰ると、斗馬はほころぶ顔で包みを開けた。標準レンズが1本着いているだけだが、一眼レフはメーカーが一緒なら手持ちのレンズを使う事ができる。

銀塩カメラ用だが、彼は適合するレンズを数本所持しているので、それらを組み合わせればかなりの用途が広がる。

斗馬は電源スイッチを入れてふと思い出した。

メモリーカードが入っていないのだ。液晶画面に『メモリーカードを挿入して下さい』という表示が出ている。

電池はサービスでくれてよこしたが、さすがにメモリーカードはそうは行かなかった。それにあの店には適合するメモリーカードがなかった。

「仕方ない、明日買いに行くか……」

斗馬はそう呟いて、黒い光沢を発するカメラを眺めた。

斗馬は購入したデジタルカメラをすこぶる気に入っていた。何と言っても高級機だ。不満な点は何もない。

大学にも持ち歩いてはキャンパス内の景色を切り撮ったり、時には友人達をフラインダーに収めた。

彼は大学では写真サークルに在籍している。

みな一様にデジカメの高級機を持ち歩き、やっと斗馬もその仲間入りとなったわけだ。

とは言っても、大半はアイドルや素人相手の撮影会などでそのスペックは発揮される。

斗馬以外で真面目に風景写真を中心に撮るのは数人しかいなかった。

た。

もちろん彼も人物撮影の一環として撮影会には参加したりするが、メインは風景だった。

去年はわざわざ冬の北海道へ雪山や動物を撮りに行った。

風景写真に興味のない連中は、口を揃えて「そんな所にわざわざ行く気が知れない」と言っていた。

「よう、記念に俺も撮ってくれよ」

昼のキャンパスで、友人の草加克くさかまさとが声をかけた。

「ああ、いいぜ」

2ギガのメモリーカードを入れた斗馬のカメラは、画像サイズをそれなりに上げてても、持て余す容量だった。

かと言つて、必要以上のサイズでスナップを撮る必要はない。

斗馬はバックから取り出したカメラを克に向けてシャッターを切った。

ほんの一枚撮ったところで、たまたま通りかかった知り合いの女の子が寄ってきた。

「ねえねえ、あたし達も撮ってよ」

「ああ、いいよ」

そう言つた斗馬は、画像サイズをワンランク上げた。

克に混ざつて一緒に写真を撮つたのは、長峰裕美子と平塚睦美だった。

最初の何枚かは三人の姿を撮つたが、その後個別で撮つてあげた。もちろん二人の女性がメインだ。

二人共以前から知り合いだったが、それまではただの顔見知り程度だった。しかし写真を撮つてあげた事で、彼女達とは今まで以上に親しくなった。

特に長峰裕美子は斗馬と気が合った為、急激に距離を縮めた。

学年は一つ下だったが、彼女は片親の為かしっかり者で、そのくせ時々甘える所が斗馬の心を何時もくすぐった。

小柄な彼女は、少し長い髪の毛をいつもアップにしているような元気イッパイの娘で、その髪を解いだ時に見せる女らしさのギャップがますます斗馬の心を捉えた。

写真を撮ってから十日以上が過ぎて、その頃にはもう、斗馬のアルバイトには裕美子が頻繁に泊まるようになっていた。

その日も斗馬は彼女と一緒に夜を過ごしていた。

二人の気持ちが頂点に達しようとしていた時、突然斗馬の携帯が鳴った。

時刻は深夜の1時を回っている。

突然鳴ったコール音に驚いた二人は、現実に取り戻されて一瞬で冷めてしまった。

斗馬は着メロが嫌いな為、普通のコール音を用いている。もちろん、相手によって音の種類は変えてはいるのだが……

突然鳴った音は小気味よく途切れる感じの音で、それは男友達を示していた。

「なんだよ、もう……こんな時間になんだ？」

斗馬は裕美子の華奢な身体から離れると、ベッドの上から手を伸ばしてテーブルの上の携帯電話を掴んだ。

「はい………えっ？」

電話を受けて直ぐ、斗馬の顔色が蒼白に変わるのが裕美子にもわかった。

「どうしたの？」

タオルケットを引っ張り揚げて胸を隠しながら裕美子も起き上がって、電話を切ったまま呆然とする斗馬に声を掛けた。

「克が……交通事故に遭ったって」

「草加くんが？」

裕美子も表情を強張らせた。

「それで、なんだって？ ケガは？」

裕美子は矢継ぎ早に質問した。

「死んだって……」

斗馬はぼそりと呟いた。

【第2話】シミ

草加克は車でドライブ中、首都高速で起きた多重事故に巻き込まれて死亡した。

彼が何時も自慢していたR32GT-Rは見る陰もなく潰れていた。前後から大型トラックに挟まれる形で一緒に最初の事故車に追突したらしい。

克と斗馬は大学に入ってから知り合った仲だったが、入学式の帰りには、すでに一緒に飯を食いにいったほど気が合った。

カメラを始めたのも、実は彼の影響だった。

斗馬は二年になった昨年 of 春にサークルに入ったが、克は入らなかった。デジカメを使う連中が多くて、銀塩を知らない奴もいる。そんなサークルには入る気にはなれないと言っていた。

それでも、時折斗馬は克と二人で写真を撮りに出かける事もあった。

しばらくの間、斗馬は裕美子と一緒にいても何処か塞ぎ込んでいた。

裕美子は気に掛けてくれたが、それでどうにかなるものではない事は、彼女も、斗馬自身も判っていた。

何れ時が解決してくれる。それしかないのだと思っていた。

その日、斗馬は久しぶりにカメラを手近所の公園に出向いた。裕美子が写真を撮って欲しいと言い出したので、彼もそれに乗ったのだ。

おそらく、彼女なりに斗馬に気分転換をさせようと思ったのだろう。

梅雨入り前の初夏の青空が眩しく輝いていた。

池のほとりで早咲きのアジサイが陽光を浴びて綺麗だったので、

そこに裕美子を立たせて斗馬はカメラを構えた。

しかし、その途端彼は表情を曇らせた。

一端覗いたファインダーから視線を外して、カメラの全面部を見つめた。

見た感じは何も異常は無かった。

彼は再びファインダーを覗いて、また止める。

「どうしたの？」

奇妙な彼の行動に、アジサイの横に立ったまま裕美子が声を掛けた。

「いや、ちよつとな」

そう言いながら、斗馬はレンズを一端カメラから外してその中を確認する。そして、カメラ本体の内部、ミラーやCCDカメラの部分もチェックしていた。

「調子悪いの？」

裕美子が斗馬に近寄って来た。

「うん……」

斗馬は浮かない返事をした。

カメラバックから取り出した他のレンズを取り付けて、再びファインダーを覗く。が、直ぐにカメラ本体とレンズを正面から覗き込む。

「何？」

裕美子は怪訝な顔で訊いた。

「ちよつと覗いてみな」

そう言つて、斗馬は裕美子の顔にカメラを近づける。

裕美子は言われるままファインダーを覗こうとするが、一瞬躊躇して

「押すの無しだよ」

覗いてみな。といつて、覗いた瞬間に頭を押したりして顔をぶつけさせる悪ふざけを昔経験した事があつた。

「そんなんじゃないって」

斗馬は真剣に言う裕美子に、思わず笑った。

「あつ、何？ これ」

ファインダーを覗いた裕美子が言った。

斗馬に言われて覗き込んだカメラのファインダーの中には小さなシミがあつたのだ。

横長の長方形のちょうど真ん中には測距、測光用のマス目が幾つか並んでいる。その調度真ん中から少しずれた場所に小さなシミがあるのだ。

ファインダーを覗いた感じでは、それがレンズやミラーの汚れのようにも見える。

裕美子も思わずカメラの全面部からレンズを覗き込んだ。

「レンズじゃ無いみたいなんだ」

「そうなの」

斗馬は克が亡くなってから、今日初めてカメラを取り出した。そして久しぶりにそのファインダーを覗いたのだ。

彼はカメラの背面に装備されている液晶画面をONにしてみた。

通常、デジタル一眼レフカメラの液晶画面は撮影時に被写体を表示する事は出来ない。液晶画面を見て撮影する事は出来ないのだ。一眼レフカメラはCCDとレンズの間にミラーがある為、シャッターを切ってミラーがアップした時以外はCCDには何も映らないからだ。だから撮影時は操作メニューが表示される。

すると、確認し難いがやはり液晶画面にもシミが映っているようだ。木陰に入って確認すると、それは明らかだった。

「とりあえず何枚か撮ってみよう」

斗馬はそういつて裕美子にカメラを向けると、さっきのアジサイの咲いている場所まで戻る彼女を連写した。

そして、ついなのでアジサイと一緒に数枚シャッターを切った。直ぐにプレビューでそれらを確認する。陽差が強くて見づらいので、再び木陰に入った。

「どう??」

裕美子も駆け寄ってきた。

「うん。写真は大丈夫みたいだ」

レビューで見た写真画像にはシミは見られなかった。

しかし、操作メニューにすると再びシミは浮かび上がる。

それにしてもおかしい。レンズに異常が無いのに何処に出来たシミなのか……ファインダーのガラスに出来たシミとも考えたが、背面の液晶画面にも映るという事は、そうではないのだ。

しかも、レビューを映し出すとそれが無くなる。いったい何処に出来たシミが映し出されているのか？

斗馬は疑問を抱えたまま、とりあえずは写真を撮り続けた。

裕美子は散歩中の柴犬を見つけると、駆け寄って頭を撫でた。妙に人懐っこい犬で、彼女に擦り寄っていたので一緒にファインダーに収めた。

ファインダーの中の裕美子はひと際輝いて見えた。弾けるような彼女の笑顔を、斗馬は久しぶりに見た気がした。

ただし、常に視界の中央に入るシミは、どうにも邪魔くさかったが。

【第3話】友人の影

アパートに戻った斗馬は、カメラから抜き出したメモリーをパソコンにコピーした。

やはり撮影した画像はクリヤーで、何も問題ない。メモリーには生前の克の画像も入ったままだった。

パソコンにもコピーはとってあるが、あんな事があってどうにも消去する気になれないでいたのだ。

このメモリーカードが一杯になったら、そのまま封印して、新しいメモリーを使おう。斗馬はそう思っていた為、今のカードから克の画像を消す気は無かった。

何日かして、斗馬は再びカメラを手にした。

明日のサークル合同撮影会に来てくれと頼まれたのだ。

合同撮影会とは、他の大学の……もちろん主に女子大だが……カメラサークルと合同で撮影会をする。という名目の合コンだ。言い方を変えているだけに過ぎない。

まあ、写真撮影はとりあえず行うのが恒例となっではいるが……主旨はその後の飲み会にある。

斗馬はカメラバッグからカメラを取り出して、この前のファインダーのシミの事を思い出した。

……そう言えば、あのシミどうなった？ 自然に消えてればいいのだが。斗馬はそんな都合のいい期待を込めてカメラの電源を入れた。

背面の液晶表示がONになったままだった。が、それを見て斗馬は驚愕した。

この前の小さなシミ。あれが大きくなっていたのだ。しかもよく見ると、臃気な人の顔の形をしているように思えた。

「なんだ、これ？」

斗馬は恐る恐る、液晶画面を見入った。そして、ファインダーも

覗いてみる。

同じく大きくなったシミは人の顔の輪郭を映し出していた。
何となく目鼻があるような、そんな気さえした。

「どうなってるんだ？」

部屋の中に向って斗馬はカメラを構えてみたが、何処にカメラを向けても、ファインダー内の中央に浮かぶシミは変わらず存在していた。

「まいったな……邪魔でしようがない」

念のため部屋の中を試し撮りしてみたが、プレビュー画像はやはり問題無かった。写真は正常に写るのだ。一体どの部分に存在するシミなのか……斗馬には検討が付かなかった。

翌日斗馬は仕方なくシミのあるカメラを持って家を出た。

背面の液晶画面をOFFにして使っていたので、誰にも奇妙なシミを気付かれる事は無かった。

主旨である飲み会を早めに切り上げた斗馬は、アパートへ帰ると今日の撮影分をパソコンに取り込んで、再びメモリーをカメラに戻すと、撮影モードに切り替えてみる。

ファインダーを覗いた斗馬は、言葉を失った。

「……………」

ファインダーから慌てて目を離すと、液晶画面をONモードに切り替えた。

撮影モードの画面の真ん中にぼんやりと浮かぶ姿。それは、もうどう見ても人の顔だった。昨日、いや今日の昼間見た時よりも明らかに鮮明になっている。

まだ輪郭ははっきりしないが、目鼻と口が完全に浮き出ていた。想像力のない人間が見ても、それは一見して人の顔だと判るだろう。しかも、斗馬にはそれが誰の顔なのか直ぐに判った。

髪の毛もまだ朧気だったその浮き出た顔は、確かに草加克のもの

だった。

「どういうことだ……」

斗馬は思わず意味がないと知りながら、カメラの正面や側面を舐めるように見入った。

外観は何の問題も無い。

しかし、液晶画面とファインダーの中には確かに克の顔が浮き出ている。

……液晶画面の焼き付き現象か？ いや、ありえない。この顔は何も無かった場所に自然に浮き出て来たのだ。それにファインダーの中はどうなる？

斗馬はどうにも気味が悪くて、カメラの電源を切った。

電源を切っても、ファインダーの中には顔が浮かんだままだった。

その夜遅い時間にも関わらず、何日かぶりに裕美子を部屋に呼んで、一緒にベッドで戯れた。まるでカメラの映像を無理やり忘れる為のように、彼女を激しく抱いた。

「ちよっと、痛いよ」

「う、ごめん」

「どうしたの？ 斗馬くん、今日は何かへんだよ」

彼の腕の下で彼女が言った。

「そんな事無いさ」

斗馬はそんな裕美子の言葉を振り払うかのように、彼女の身体に唇を這わせた。

「人って、死んだら何処へ行くのかな」

ベッドの上で天井を見上げた斗馬が呟いた。

裕美子は少々疲れたようで、気だるそうな瞳で彼を見た。

「斗馬くんは、天国とか信じてるの？」

馬鹿にした言い方ではなかった。

「いや、そんな事じゃなくて……」

斗馬は言いかけてそれを飲み込んだ。

「あたしは、何も無いような気がする。だから何処かへ行くとか、
そう言うのは無いんじゃないかと思うんだ」

「何処にも行かないって事？」

斗馬の問いに、裕美子は首を横に振った。

「全部無くなるって事。何もなくなるんだから、何処にも行きよう
がないでしょ」

「そうか」

斗馬はそう言って、頭の後ろで両手を組んだ。

裕美子は、彼の片方の腕に自分の頭を乗せると、猫のように小さく
喉を鳴らす真似をした。

【第4話】復活

翌朝は裕美子の方が講義の始まる時間が早かったので、先にアパートを出た。

斗馬はシャワーを浴びた後、再びデジカメを取り出す。あの顔がどうなったか無性に気になったのだ。

電源を入れて、液晶画面のモードをONにする。

「やっぱり……」

斗馬は呟いた。

浮き上がった画像には、昨日よりも鮮明な克の姿があった。もう、だれがどう見ても草加克の顔以外、何者でもない。

そして、浮き出た顔はあまりにも立体的だった。

「克、お前なのか。どうしてそこにいるんだ？」

斗馬は思わず話しかけた。すると、彼の顔は微かにほころんだように見えた。

斗馬は目を見張った。

「いったいどうなってるんだ。おい、克」

彼は何度も問いかけた。しかし、自分の声が克に届いているのかどうかは判らなかった。

大学の講義が終わると、斗馬は裕美子の手を引いて急いで自宅アパートへ戻った。

「どうしたの？ 何？ 見せたいモノって」

部屋に入った裕美子は、床にペタリと腰を降ろした。

「いいか、驚くなよ」

斗馬はデジカメの電源を入れると、液晶表示もONにして自分は

見もせずに裕美子にそれを手渡す。

裕美子は手渡されたカメラを少しの間眺めてから

「ああ、あのシミなくなつたのね。結局何だったの？」

そう言つて、斗馬を見た。

「シミの代わりがあるだろ」

「何？」

「そこにある顔だよ。誰の顔か判るだろ」

「だ、誰の顔？」

裕美子は小首を傾げながら訊きかえす。

「克だろ。誰が見たつてこれは……」

怒鳴るようにして裕美子の手に在るデジカメを覗き込んだ斗馬は、途中で言葉を失つた。

「ない。何処に行つたんだ？」

斗馬は目を見開いて叫んだ。

「どうしたの？」

事情が飲み込めない裕美子は怪訝な笑みを浮かべて斗馬を見た。

「ここに、この中に克がいたんだよ。この前の小さなシミが、克の顔になつたんだ」

しかし、今見ているデジカメの液晶画面には、何も無い。撮影モードが表示されているだけだった。

斗馬は彼女の手からカメラを取り上げると、ファインダーを覗いた。

やっぱり克の姿は無い。シャッターボタンを半押しすると、ピンリングが微かに回つて間近にいる裕美子の顔をアップで映し出した。

「ほんとなんだ。この前のシミが大きくなって、克の顔になつただよ」

困惑する斗馬を見た裕美子は

「し、信じるよ。あたしは信じるから落ち着いて」

そう言つて、彼の肩に手を触れた。

「信じるとか信じないとかじゃないんだ。事実なんだよ」

「判った。判ったよ。だから、落ち着いて」

斗馬は、裕美子のそんな言い方に益々苛立ちを覚えた。

裕美子は、改めて斗馬が友人を思ふ気持ちを知った。おそらく彼の死を嘆くあまり、斗馬にはあのシミが克の顔に見えたのだと思った。

だから、それを異常だとか怪訝おかしいとか思う気持ちはない。彼の話を一生懸命聞いてあげる必要があるのだと思った。

「本当にここにあったんだ。克の顔が」

「うん。草加くん、斗馬くんに会いに来たのかもね」

裕美子は斗馬の気持ちを傷つけなくなかったし、本当にそんな気がしたのだ。

その時、玄関のチャイムが鳴った。

思わず斗馬と裕美子は顔を見合わせる。

少し間を置いて斗馬は立ち上がると、玄関へ行つてドアのマジックアイから外を覗いた。が、直ぐに後へたじろいで、その拍子にひっくり返つて尻餅を着いた。

「何、どうしたの？ 斗馬くん」

斗馬の姿を見た裕美子が慌てて玄関へ出てきた。

「ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま……」

「ま？」

裕美子は斗馬を跨ぐようにしてドアへ近づくと、彼女もマジックアイを覗く。そして

「ひっ」と、悲鳴を飲み込んだ。

振り返つて尻餅を着いたままの斗馬を見下ろす。

あまりの驚きに、彼女も言葉は出なかった。

斗馬はおずおずと立ち上がつてとにかくドアのロックを外したが、その時、裕美子が我に帰つてドアノブに触れる彼の腕を掴んだ。

「どうして、どうして彼がいるの？」

「俺が知るか」

「だって、彼はこの前……」

裕美子は壁易へきようしていた。

「とにかく本当に本人か確かめよう」

二人で顔を寄せ小声で議論した後、斗馬がドアノブを掴み直す。
その手が小刻みに震えた。

ハンドルを回し、果断かたんな思いでドアを押し開く。

「よう。久しぶり」

開けたドアの外には、あまりにも陽気に笑う草加克くさかまさとの姿があった。

【第5話】残虐

「じゃあ、今までどうしていたか記憶は無いの？」

裕美子が訊いた。

「ああ、最後に記憶しているのは高速で前方の事故車に突っ込む所……かな。いや、その後、俺の車にトラックが突っ込んで来たところか」

克はそう言つて、斗馬が差し出した麦茶をゴクゴクと美味^{つま}そうに飲んだ。

斗馬と裕美子は克と向かい合っていた。

彼には死後の記憶は無い。

しかも火葬したはずの彼の身体は、どうやって再生されたのか？
しかし、斗馬にも裕美子にもそんな事を考える余裕はなかった。

死んだはずの人間が目の前でニコニコと会話を交わし、麦茶を飲んでいる。

それだけで、充分自然の摂理を越えているのだ。物理の常識だつて通用しない。

「おまえ、住むところはどするんだ？」

斗馬は妙に現実的な質問をした。

「ああ、さつき実家に電話したら、まだアパートは引き払ってないつてさ。だから、そのままそこに住むよ」

「お前、実家に電話したのか？」

「ああ、携帯電話はなかったけど、財布にテレカが入ってたから」

「そ、そうか……」

斗馬も自分の麦茶を飲んだ。

「実家の人は何て？」

「ああ、何だか半信半疑でさ。新手の詐欺じゃないかって。とりあえず今夜の最終で実家に行つてくるわ」

それはそつだ。葬儀も済ませた人間が、「実は生き返ったから仕

送りくれ」なんて言って信じる親がいるわけが無い。

「そ、そうか」

斗馬はただ頷くだけだった。

「それでさ、電車賃足りないから貸してもらおうと思って来たんだ」
克はあっけらかんと言った。

「そうか……で、いくら足りないんだ？」

草加克の実家は仙台にある。

「ああ、片道分あればいいから、とりあえず一万貸して。残りは自分の金もあるから」

斗馬が一万円貸し与えると、克は最終の新幹線に乗る為に去っていった。

彼が去ったあと、斗馬と裕美子は少しの間黙ったままお互いの顔を見つめていた。

「あ、あたし、ちょっとトイレ」

斗馬は複雑な気持ちだった。どうして克は生き返ったのか。

そかし、そんな事はいくら考えても判らなかった。ただ、自分のデジカメに浮き出ていた彼の顔が、何か関係しているような気がした。

それでも、克が戻って来た事を嬉しくないわけが無かった。

だから、その事について、彼は深く考えようとしなかったのかもしれない。

しかし、そんな喜びは直ぐに掻き消されてしまう。

二日後、大学のキャンパスの中には草加克の姿が在った。
多くの生徒が異様な眼差しで彼を遠巻きに見つめる。

「おい、あいつ何でいるんだよ」

「アイツがどうかしたのか？」

「あいつ、この前自動車事故で死んだはずだ」

「おいおい、俺アイツの葬儀行つたぜ」

斗馬は克を見つけると、慌てて彼を校舎の陰に連れて行つた。

「おい、いきなり学校はまずいだろ」

「そうか？」

「だって、お前……どう説明する気だ」

「いや、どうしたらいいか、さっき学生課へ相談に行ったら、俺除籍になつてたよ」

克はそう言いながら、軽々しく笑つた。

「そうか……しかたないかもな。ご両親は何て？」

「ああ、これ。借りてた1万円な」

克はそう言つて斗馬にお金を手渡すと、彼の質問には応えなかつた。

「おい、何処行くんだ？」

そのまま歩き出した克は

「少しブラブラするよ。とにかくやりたい気分でさ」

斗馬は彼の後姿を見つめるだけで後は追わなかつた。今の克が違ふ人物に見えた最初の瞬間だつたかもしれない。

それでも克の事が気になつた斗馬は、大学の帰りに彼のアパートに行つてみることにした。

裕美子も心配して付いて来た。何だか嫌な予感がして、最初は断つたが結局二人で彼のアパートへ向う事にした。

最寄の駅を降りて商店街を抜けると住宅街は比較的静かだつた。左側に金網で囲われた小さな公園が在る。スベリ台やシーソーが淋しげに佇む児童公園に人影は無い。

その横を取り過ぎようとした時、側道に何かが散乱している。

周囲には黒ずんだ車のオイルをまいたような跡もあって、最初は落ちていたモノがぼろきれのようにも見えた。

しかし、突然裕美子は小さな悲鳴を上げて両手で口を塞いだ。

斗馬もそれが何かを認識すると、絶句した。

散乱している残骸……それは猫の死体だった。身体が切り刻まれている。

どう考えても、車に引かれたとかそんな感じではない。鋭利な刃物か何かでズタズタに切り裂かれて胴体は数個に分断されていた。

黒い油のように見えたのは、全て血溜まりが乾き始めてできたものだった。

転がった小さな頭部は、目を見開いて虚空を仰いでいた。

……生きたまま、切り裂いたのだろうか。

ふと裕美子が自分の足元に視線を移してガタガタと震えだす。

彼女の足元には、猫の片脚が落ちていたのだ。

黒々と血に染まって何色の猫だったのかはわからないが、上を向いた肌色の肉球が生々しい。

それはあまりにも無造作で、惨たらしい光景だった。

「誰がこんな事を……」

裕美子は唇を震わせて瞳からポロポロと雫を零した。

「酷い奴がいるもんだ……」

斗馬は彼女の肩を抱き寄せると、反対側の側道へ渡り足早にその場から立ち去った。

「この辺には変質者がいるのかしら」

裕美子は不安げに、鼻にかかる涙声で呟いた。

「おかしい奴は何処にでもいるさ」

斗馬はそう呟くと、裕美子の手をとった。彼女はまだ少し震える手で、斗馬の手を握り返した。

【第6話】変貌

「ここだ」

斗馬はそう言つて、古びれたアパートを見上げた。

敷地を入った直ぐの所に集合ポストが在り、201号室に『草加』と書かれていた。斗馬は以前何度か来た事がある。

裕美子を下に残し、斗馬は鉄板の剥き出しになった階段を上つて201号室のチャイムを鳴らした。

中でチャイムの音が鳴り響くと

「誰？ 開いてるよ」

中から克の声がした。

斗馬は何となくホツとした気持ちでドアノブを引く。

彼が何処かへ消えてしまったのではないかと思つていたからだ。

「俺だ、斗馬だ。入るぞ」

そう言つて中を覗いた斗馬は思わず身体を硬直させる。

「な、なにしてるんだ？」

小さなキッチンから部屋までは一直線で、中は丸見えだった。

そして、その先のベッドの上で、克は裸の女性の上に覆いかぶさりうごめいて、顔だけをこちらに向けていた。

それがただのエッチな行為ではないと、斗馬は直ぐに気付いた。

女性の両手が頭上で縛られて、ベッドに括り付けられていたからだ。口はタオルで塞がれている。

ベッドに縛られた女性は、以前裕美子と一緒に写真を撮つてあげた平塚睦美だった。

苦しげにもだえる瞳からは、涙が溢れていた。

「お前、何やってるんだ！」

斗馬は靴も脱がずに部屋に上がると、克の身体を睦美から引き離した。

突き飛ばされた克は畳みの床に転がった。睦美の全身が露になる

と、彼女はまだかろうじて下着を着けていた。

口を塞がれて声を出せない彼女は「うう……う」と嗚咽をもらしている。

斗馬がそのタオルを外すと、苦しかったのか深く息を吸いこんだ。
「大丈夫か？　しっかりしろ」

縛られた手からロープが解かれ両手になった彼女は、斗馬にしがみ付いて泣いた。

「克、どうしてこんな事を？」

「その女がついて来たんだぜ。だから俺は自分の好きなようにしたまでさ」

斗馬は言葉が出なかった。

光のない克の瞳が、ゆらゆらと斗馬を捉えていた。

「お前、克じゃないのか？」

斗馬の口から思わず出た言葉だった。

自分の知る草加克がこんな事をするとは思えない。

「心配するな、お前の女も楽しませてやるぜ」

克はそう言っただち上がると、自分の衣服を抱えて玄関へ走った。

「おい、待て」

睦美がしがみ付かれて、斗馬は直ぐに克を追うことが出来なかった。彼女の腕をそつと解いて彼を追ったが、玄関の外に出た時は既に克は通りを駆け出していた。

そこで裕美子を下に待たせていた事を思い出し、慌てて階段を下りる。

「裕美子」

階段の下に、裕美子の姿は無かった。

「裕美子！」

斗馬は愕然と肩を落とした。

……克が連れ去ったのか？　いや、僅かに見えたのはアイツ一人の姿だけだった。

通りへ出た斗馬は、左右を見回した。

「どうしたの？ 草加くんいた？」

裕美子が一階通路の奥から姿を現した。

「何処にいたんだ？」

「ご、ごめん。今猫がいたから追いかけて……何かあったの？」

* * *

睦の身体は無事だった。

警察への被害届は出さなかった。

どう説明すればいいのか判らない。克は戸籍上死亡しているのだから。

この先彼はどうやって生きていくのか？

翌朝目覚めた斗馬は、何時もの習慣でまずテレビを点ける。

ワイドショウのトップニュースは、昨夜惨殺死体で見つかったという家族の事件が流れていた。どうやら死亡推定時刻から、犯行は3日前頃に行われたらしいと話している。

斗馬は途中からそのニュースを見た為、それがどこで起こった事件なのか判らなかった。

しかし、何気に見た画面の左上には『仙台の一家惨殺事件』と書いてあった。

一瞬戦慄が走る。

これは偶然だろうか……

死んだはずの人間が向った場所だからこそ、不審に思ったのかもれない。いや、あの人が変わったような克の姿を見たからだ。

しかし、いくらなんでもアイツは人を殺すような奴じゃない。真っ先に自分に言い聞かせた斗馬の思いを打ち砕く言葉が、テレビから聞こえた。

『惨殺されたのは草加さん一家で、先月東京に住む長男が交通事故

で亡くなっており……」

……克の家だ。斗馬の脳裏にはそれしか浮かばなかった。仙台に草加という家が一体どれほど存在するのか知らないが、今の斗馬には克以外には浮かばない。

しかし何で。誰が……いや、答は判っている。

一家を殺したのは……克しかないだろう。

あの狂気に満ちたような光の無い克の目を思い出した時、あのアパートに行く途中の猫の残骸を一緒に思い出した。

あれは、もしかしたらアイツの仕業かもしれない。そう思う事が自然なくらい、あの時の克の目は完全に常軌を逸していた。

斗馬はテレビの画面を見ながら、彼は何処に行ったのか？ そればかりが気がかりだった。

嫌な予感に追い立てられながら、裕美子に電話をした。

【第7話】他のモノ

「そんな、まさか……」

裕美子は電話の向こうで驚愕した。

「今の克はどうもおかしな所がある」

「確かに睦美に乱暴したのは確かだけど、どうして彼が自分の家族を殺すの？」

克の実家の家族は、両親と妹、そして祖父母、全部で五人が惨殺されていた。そして家中の金品が奪われたらしかった。

克が実家へ帰った直後の出来事だ。そして、克は行方知れず。

もちろん、世間では彼は既に死亡した事になっているので、この犯行が克の仕業だと思っ者はいないだろう。

「とにかく克は危険だ。見かけても絶対に近寄るな」

「判ったわ」

電話を切った斗馬は、あのデジカメを何日ぶりに手に取って電源を入れた。

すると、驚いた事に再び誰かの顔が、ファインダーと液晶画面に浮かんでいる。しかも、今度は全く知らない顔だ。

既に目鼻もはっきりと浮き出ていたその顔は、四十代くらいの男性のようだった。全く関わりの無い男が何故カメラの中に浮き出てきたのか……

斗馬はとっさの思いつきで、プレビュー機能を使って、メモリーの中の画像を探した。

すると、以前駅向こうの公園で裕美子を撮った時に背後に写り込んでいる男性がそれだった。

……どういう事だろうか。何故この男性が浮き出てくるのか、どうしても判らない。

次の日、あの中年男性の顔は、ファインダーと液晶画面から消えていた。

一瞬ホツとした斗馬だったが、克の時を思い起こして身体が震えた。

あの男は死んだのではないだろうか？　そしてデジカメの液晶に現れた。そして、そこから消えたという事は……斗馬はその先を考えるのが怖かった。

そんな斗馬を嘲笑うかのように、デジカメの液晶には既に次のシミが出来ていた。

次は誰だ？　どんな奴が現れる？　斗馬は恐怖とは裏腹に、異常な興味が沸き起こる自分を感じていた。

しかし、そこに現れたのはどうも人の顔にしてはおかしい……そう思っていた通り、今度は犬の顔が現れた。

斗馬は直ぐに気付いた。それは、以前公園で裕美子が頭を撫でていた人懐っこい柴犬だった。

……この犬も死んだのか？

その夜、何日かふりで裕美子が部屋に来た。

次々にカメラの液晶に浮かび上がる顔の事を裕美子に聞かせた。

「じゃあ、みんな死んでるのかしら」

「さあな、知らない奴は調べようがない」

斗馬は床に座ったまま、ベッドの縁に寄りかかる。

「その犬だったら、公園に行ってみれば判るかもよ」

裕美子は斗馬に寄り添うように身体を寄せて言った。

翌日、デジカメの液晶に現れた犬の顔は消えていた。

日曜日だったので、二人は以前行った時と同じような時間帯に公園に行って見る事にした。

近所といっても駅向こう。歩いて十五分くらいはかかる。

「犬の散歩って、だいたい同じような時間にするでしょ」

「そうだけど、みんながみんなそうだとはいえないんじゃないか？」

「でも、たいがいは一緒よ」

「どうして判るんだ？」

「だって、犬がその時間になると、散歩行こうよ。て、騒ぎ出すもの」

「へえ、そんなんだ」

斗馬は犬を飼った事が無いので判らなかったが、裕美子は実家で犬を飼っているのですんなり習性を知っていた。

二人は公園の敷地に入った。

そんなに大きな公園ではないが、周囲を垣根で囲んで雑木林もある。真ん中に池があつてその周りには遊歩道が設置してある。

斗馬と裕美子は、遊歩道に沿ってブラブラと歩いた。

「確か、この前来たのも今頃の時間よね」

裕美子がそう言つて斗馬を見上げたようとした時、前方からあの柴犬が歩いて来るのが見えた。もちろん、リードを着けて飼い主に連れられている。

「あれ、そうだよな」

裕美子は笑みを浮かべると

「やっぱり死んだわけじゃなかったのよ」

「いや、待て」

斗馬は、犬に向つて近づこうとした裕美子の手を掴んだ。

確かに飼い主も、あの時一緒にいた多少ふくよかな中年女性に間違いない。しかし、斗馬は腑に落ちなかった。

「死んでから戻つて来たのかも」

斗馬の言葉に裕美子の顔が強張る。

立ち止まっていた二人の前にその柴犬は近づいてきた。

裕美子はしゃがみ込むと、多少恐る恐るだったが以前のように犬に手を伸ばした。が、その途端「ガウツ」と声を出して、柴犬は彼女の手に噛み付こうとした。唸りを上げる間もない。

鼻の頭に陰しく寄つたシワと白い牙は、敵意を剥き出しにしてい

た。

一瞬早く飼い主の女性がリードを引いたので、犬の牙は空を噛んだが、裕美子も慌てて手を引っ込めた。

「大丈夫か？」

一歩後にいた斗馬が、目を丸くして驚いている裕美子の肩に触れる。

一瞬獰猛な表情で自分の手を容赦なく噛み付こうとした犬に、彼女は恐怖した。

しかしその犬は、その後何事も無かったような澄ました顔をしている。

「ごめんなさいね。最近ご機嫌ななめで」

飼い主が苦笑しながら言った。

「その犬は以前コイツに、いやこの女性にもなつきましたよね」

斗馬が飼い主の女性に訊いた。

「前は誰にでもなついたんですよ。それなのに、先週逃げちゃって戻って来たら何だか別の犬みたいになっちゃって」

「逃げたんですか？」

「ええ、うちは……本当はいけないんですけど、庭の中で放し飼いなんですよ。それで、玄関の横に仕切りを設けているんですけど、それをうちの人が閉め忘れて」

飼い主の女性はそう言って、思い出したように憤懣ふんまんな顔を見せた。

「どのくらい行方不明に？」

「6日くらいかしら。あたしも半分は諦めてたんですけど」

そう言ってから女性は笑みを増して

「そしたら今朝早く、自分で戻って来たの」

「そ、そうですか」

斗馬はそう言って、犬を見下ろした。

「なんだかあまり触られるのが嫌みたいで。あたしもほら」

そう言って差し出した女性の左右の手にはバンソウコウが何枚か貼られていた。

「噛まれたんですか？」

「まあね。それでもやっぱりかわいいのもでね」

飼い主の女性は、笑いながら噛まれた両手を摩った。

【第8話】謎

「あの犬はやつぱり違う犬なのかしら」

「さあな。6日間も行方をくらましていたなら、何処かで車にでも轢かれた可能性はあるな」

結局あの犬は飼い主自身が確かに自分の犬だったので、それ以上の追求はできなかった。

身体はどこかに違いがあるわけではないのだろう。

斗馬と裕美子は久しぶりに新宿まで出ると、ブラブラと時間を潰して夕飯と一緒に済ましてから別れた。

斗馬はアパートへ帰ると、直ぐにデジカメを取り出して電源を入れる。

彼女の手前、必要以上に不思議なデジカメの事は話さないが、次はどんな奴が浮かび上がるのか、正直気になって仕方がなかった。しかし、液晶画面には何も変化は無い。ファインダー内はクリアーだし、操作モードにも異常は無かった。

梅雨半ばの空は重く低い雲で覆われ、路地裏は夕暮れのように暗く荒涼な風景だった。

翌日大学へ行く為に家を出た斗馬だったが、ふと思い立って商店街の途中から裏路地へ入る。

どうして今まで思いつかなかったのか？

斗馬はあの店に行ってみようと思ったのだ。

このデジカメを売った、あの店主なら何か知っているかもしれない。そう思ったからだ。

しかし、足早に裏路地に入って鉄風堂の前まで来た斗馬は、息を弾ませながら絶句した。

「そんな……」

彼は思わず途方に暮れて佇む。

店はシャッターが閉じられて、小さく張られたボロボロの紙切れには

『閉店いたしました』と書かれていた。

斗馬は諦めきれずにその裏の民家を覗いた。店舗の後ろ側の建物が自宅になっているようなのだ。

ちょうどその時、あのヒゲ面の初老が家の玄関から姿を見せる。

両手には重そうに鞆を持っていた。

「あの……」

「おお、この間のアンちゃんか」

「店閉めちゃったんですか？」

「ああ、ここいらが潮時だからね」

「あの、相談があるんですけど……」

元店主は、斗馬の手にしたデジカメに視線を降ろすと

「何かあったのか？」

「このカメラはどんな経路で入荷したんですか？」

路地を抜けて小さな児童公園のベンチに二人は腰掛けていた。

斗馬はこのカメラに起きた事、そして死んだ友人が蘇えり、しかも様子がおかしい事を告げた。もちろん、その他の思い当たる事例も含めて。

「うむ……」

話し終えた斗馬に向って、元店主は小さく唸った。

「それは、災難じゃったのう」

「災難？」

「そのカメラで撮った人間が死んでしまうとは……」

「どういう事ですか？」

「そのカメラのメモリーに入った人間の像は、死後に焼き起こされる」

「焼き起こされる？」

「まあ、プリントアウトのようなもんか」

「何でそんな事？」

「そこまでは、わしも知らん」

「そんな……じゃあ、やつぱりここに現れた人間や犬は一度死んで、そして蘇えったと？」

「まあ、そういう事になるだろうな」

初老の元店主は、斗馬を見上げて話を続けた。

「ただ、魂は戻ってはこん」

「どういう事ですか？」

「焼き起こされた身体は、何か別のものが宿るらしい」

「別のもの？ 何ですかそれは」

「それもわしには判らん。あのカメラは、メモリーに残っている人間で死んだ者の身体を焼き起こす力がある。しかしそれは何か他のものが宿る為に行われると言う事だ」

「あんた、知っててこれを俺に売ったな」

「そんなに怒るな。誰も死ななければタダの高級デジカメじゃ。そのカメラで撮った人物が死んだのが災難のもとじゃ」

「どうすれば消えるんですか？」

「消す事などできん。そのデジカメで焼き起こされた人間の身体は本物だ」

「じゃあ、どうすれば？」

斗馬は初老の元店主に詰め寄った。

「おお、もうこんな時間じゃ。わしや行かんな。じゃあな」

そう言って初老はそくさと立ち上がった。

「いいか、焼き起こされた人間には関わるな。そして、そのカメラのメモリーカードは何時も空にしておくことじゃ」

そう言って、元店主は足早に路地を歩き去った。

斗馬は思わず呆然と立ち尽くしていたが、ハッと気付いて彼を追いかける。

しかし、先の住宅街の曲がり角を過ぎると、もう初老の姿は何処にも無かった。

沈んだ空から、小さな雪が零れ始めていた。

……何だ。何が宿るというんだ。斗馬は大学へ向う電車の中で半ば途方にくれていた。

金を借りる為に漂々として自分の部屋へ来た克が、再び訪ねて来ないという保障はない。

いくら関わるなと言っても、いくら別の何かを獲得り付いているといつても、彼の潜在意識の記憶は明らかに残っているのだ。

【第9話】宿るモノ

それからしばらくの間、克の消息は判らないままだった。

その後も何度か彼のアパートへ足を運んだが、戻って来た形跡はない。大家に話を聞いたところ、数か月分の家賃は支払い済みとの事だった。

しかし、彼が東京に潜んでいるという事は、ニュースで知る事になる。

『今日昼ごろ、20歳の大学生平塚睦美さんが自宅アパートで殺されているのが発見されました。発見者は彼女を訪ねてきた大学の知人で、睦美さんは全裸の状態で手足を切断されており……』

睦美が……斗馬はベッドに腰掛けていたが、思わず前のめりになって床に膝を着いた。

その惨忍極まりない犯人が誰なのか、斗馬には直ぐに判った。

……克だ…… やっぱり猫を切断したのもきつとアイツなのだ。アイツは何処にいる？

しかし、ニュースは続いていた。

『……で、竹本さん一家が惨殺されているのが、近隣の住人によつて発見されました。竹本さん宅では先週哲弥さんが事故で亡くなつており、家には奥さんの美津子さんと二人の子供、三人で住んでいました……』

ニュースで読み上げた住所は、駅向こうの公園近くだった。

家族の写真がテレビに映し出されて、斗馬は背筋が凍りついた。

ついでに出された先週無くなつた亭主と言うのは、斗馬のデジカメに出てきたあの中年の男だったからだ。

…… やっぱりあの男は死んでいた。そして、戻って来たあの男は、自分の家族を殺したんだ。

それは、克の行動に酷似していた。

戻った人間は、潜在意識に強く残る人間を殺すのだろうか？ し

かし、何故？

テレビ画面に食いついていた斗馬は、ゴクリと唾を飲み込んだ。そこで彼はハツと気付いてデジカメを手に取り、電源を入れた。極僅かだが、液晶画面には確かにシミが出来始めていた。それが誰なのかは明らかだった。

斗馬は慌ててメモリーの全てを消去した。

身体が本人でも、いくら睦美の身体でも、わけの判らないモノが宿るのでは意味が無い。しかも、奴らは惨忍な『別なモノ』となつて蘇えってくる。

斗馬は裕美子に電話をした。彼女もニュースを見ていれば睦美の死を知っただろう。何より彼女の身が心配だった。

克は生前、裕美子の事もひどく気に入っていた。そして、あの時言つた彼の言葉。

「お前の女も楽しませてやる」というセリフが頭の隅にずっと引っ掛かっている。

しかし、彼女の電話は繋がらない。

くそ、どうなってる……

斗馬は不安に後押しされて、アパートを飛び出した。

裕美子のマンションは電車で行くと一度新宿へ出てから乗換えがあつて意外と時間を喰うが、実際は自転車でも15分ほどの距離にあった。

斗馬は普段めつたに使わない自転車に乗ると、駅とは反対方向の大通りを抜けて、裕美子のマンションへ急いだ。

嫌な胸騒ぎが身体の内側でザワザワと沸き起こっていた。

押しつぶされそうなほどの湿気を含んだ、ジメジメとした夜風が身体を抜けていく。

大通りの歩道は、連なる街路灯で思いの外明るい。追いついてゆくタクシーのテールランプを見て、タクシーの方が速かったか？と今更ながら思ったが、それでもとにかく斗馬はペダルを踏むしかない。斗馬が裕美子のマンションに着いた時、彼女の部屋に明かりは無かった。彼は投げ出すように自転車から飛び降りると、足早にマンション入り口のガラス扉を抜けた。

四階に上がって彼女の部屋のチャイムを鳴らしても、もちろん何の反応も無い。

……裕美子は何処に行ったんだ？ まさか既に克が連れ去ったのか？

立ち止まると、湿度に煽られて全身から汗が湧き出る。

斗馬はエレベーターを降りて、マンションの入り口にあるエントランスに来ていた。もう一度携帯を手にして裕美子へ電話しようとしたその時だった

「斗馬くん」

敷地の入り口に、裕美子が立っていた。

「びっくりしたあ、どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ。携帯の電源切ってたのか？」

「あつ、ごめん。さっき一つ手前の駅で人身事故があつて、電車停まつたのよ。みんな携帯で何処かに連絡してたけど、あたしは別に連絡するところないし。だから、電源切ったままだったの」

「何処か行つてたのか？」

「友達と買い物よ。ユミとかアユとかと」

裕美子はそう言つて汗に濡れた斗馬のＴシャツに気付くと、怪訝な顔を見せた。

「どうしたの？ また何かあつたの？」

「じゃあ、夜のニュースは見えないんだな」

「何かあつたの？」

「……睦美が殺された」

裕美子は両手を口に当てて「うそ……」

斗馬は小さく首を振った。

彼女の瞳はあつという間に涙で満たされて、ポロポロと雫が零れ落ちた。

「どうして？ 誰に殺されたの？」

「犯人はまだ、いや、見つかるかどうか……」

「どういう事？ まさか？」

裕美子にも何となく犯人の察しがついたのだ。

「おそらく……克だ」

「どうして？ どうして殺すの？」

「アイツはおかしいんだ。アイツの魂は、克じゃない」

裕美子は困惑した瞳で、斗馬を見つめた。零れる雫は止まらなかった。

斗馬は裕美子の部屋に上がっていた。今夜はここにいた方が自分も安心だし、裕美子も安心するだろうと思った。

「俺、あのデジカメを買った店の店主に聞いたんだ」

斗馬は、あの白髭の初老が言った事を話して聞かせた。

「デジカメのメモリーが、死者を蘇えらせるって言っの？」

裕美子は半信半疑だった。当然の事だろう。そんな非科学的な現象を直ぐに信じる方がどうかしている。

しかし、死者が蘇えること自体既に、非科学的なのだ。そして、その証である克の姿を裕美子も見ている。

「何にしても、克の身体が再生されたのは事実だ。それは、裕美子も見たら」

裕美子は小さく頷きながら、冷蔵庫から取り出したウーロン茶を二つのグラスに注いだ。

「しかし、アイツを動かしているのは、克ではない別の何かだ」

「その、別の何かって何？」

裕美子はウーロン茶の入ったグラスをひとつ、斗馬の前に差し出

した。

微かに手が震えている。

「それが判らない。あのオヤジもそこまでは判らないらしい」

「そのおじさんは？」

「逃げられた」

斗馬はそう言っただけ肩をすくめると、グラスのウーロン茶に口を着けた。

「俺が思ったのは、浮遊している霊とか死霊とか、そう言ったものが入り込んでるような気がするんだ」

「死霊？」

裕美子は手に持っていた自分のグラスをテーブルに置いた。

「でも、草加くんも死んだわけだから、ある意味死霊になってるのよね」

「もしかしたら、一番近くにいる死霊が取り付くのかも知れない」

「じゃあ、いくら身体が蘇えっても意味がないじゃない」

「だいたい、何故あのカメラにそんな力があるのかだって判らないままだ……」

「草加くんはどうなるの？ このまま生き続けるのかしら？」

かなり落ち着きを取り戻した裕美子の顔に、再び不安と恐怖が滲み出る。

「身体は本物だって、あの爺さんが言ってたよ」

斗馬は、呟くようにそう言って目の前のグラスを掴んだ。

サラリーマンの男の事件についてはあえて口に出さなかった。あの殺人鬼達がこれから先も生き続けると思うとゾッとして、口に運ぶグラスが微かに震えた。

【最終話】メモリー

その夜、斗馬は裕美子の部屋に泊まった。小さなベッドは彼の部屋のモノと似たようなサイズなので苦にはならなかった。

妙に蒸し暑い夜だったが、クーラーをわざと強めにかけて、二人で身体を絡めるように寄せ合って眠った。

何時の間にか外には雨音が響いていた。

翌朝テレビの音で目が覚めた斗馬だったが、まどろみの中でそれに視線を移した時、一瞬で眠気が吹き飛んだ。

昨夜電車で飛び込んで自殺したサラリーマンの事件が報道されていたのだ。それは、昨晚裕美子が足止めされた人身事故だ。

そして画面に映し出された顔写真、この前デジカメの液晶に浮き出ていた男……自分の家族を惨殺した男だった。

ワイドショーでは当然のように、少し前に死んだはずの男が再び自殺？ そんな感じの奇怪さを醸し出す報道となっている。

「あら、やっと起きたのね」

裕美子は朝食にベーコンエッグを焼いてテーブルに置くと、カップにコーヒーを注ぐ。

「どうしたの？ そんなに真剣にワイドショーなんて見て」

裕美子は少し不安げにテレビを覗き込む。克に関する事件がまた報道されていたと思ったのだろう。

「いや、なんでもないよ。ちょうど昨日の、ほら、お前が足止めくらった人身事故の報道をやってたんだ」

斗馬はそう言って、コーヒーカップを手にした。あの男の事は裕美子には言わなかった。

ただでさえ克の事と睦美の事で混乱しているのに、これ以上に彼女を不安にさせたくは無い。

「さっき睦美の実家に電話したら、今日の夕方からお通夜だって言

うから、あたし行つて来るね」

睦美は大学に電車一本で通える場所にひとり暮らしをしていたが、実家は川崎にある。

「気をつけて行つて来いよ」

斗馬はそう言つてから「いや、俺も行こう」

それを聞いて、裕美子も何となくホツとした笑顔を見せた。

しかし、再びニュースが二人を震撼しんかんさせる。

あの柴犬を連れた中年の女性の写真がテレビに映し出されていた。彼女は旦那と二人暮らしで、子供はいなかったらしい。そして二人共、何か獣によつて噛み殺されていたというのだ。

近くの通りでは、彼女の家で飼われていたと思われる犬が、車に撥ねられて死んでいるのが発見されたようだ。

警察はその飼い犬の歯型と、被害者の傷跡を照合しているらしい。裕美子は両手で口を塞いだままテレビ画面を見つめて、メドウスメドゥーサの呪いにも掛かったかのように硬直している。

斗馬には判つていた。

警察が照合などしなくても、飼い主を殺したのはあの犬だという事が。

クーラーをかけているというのに、額と背中汗で濡れていた。

通夜の帰り、名残惜しむ裕美子はなかなか睦美の実家を後にしようとしなかった。

一緒に行った女の子数人は、焼香を終えると早々に帰つていったが、斗馬と裕美子の二人が睦美の実家を出たのは夕刻の6時を過ぎていた。

新宿駅に着いた頃には、陽も沈みきる所で、空は一面が紺青に変わっていた。会社帰りのサラリーマンや学生で駅は当然のようにま

だ混んでいる。

その中で、斗馬も裕美子も、二人を見続ける視線に気付く事は無かった。

「明日の葬儀は、斗馬くんどうする？」

駅の階段を下りながら裕美子が言った。

「どうするかな。やっぱり行った方がいいんだろうな」

斗馬は急ぎ足のサラリーマンに道を開けた。

先月から今月と立て続けに知り合いの葬儀に出るのは、なんとも逡巡^{しゅんすん}する思いだったが、それは裕美子も同じだろう。

構内は、アナウンスと発車メロディーが幾重にも折り重なって喧騒に満ちていた。

山手線のホームに二人が辿り着いた時、侵入してくる電車が直線の先にちょうど姿を現した。

すぐ近くを誰かが無造作に通り過ぎてゆく。それは当たり前前の光景だった。この雑踏の中で気にする者などいない。

しかし、次に裕美子の傍を通った男は、そこで足取りを緩めた。

裕美子本人は何も気に留めなかったが、斗馬はふとその男を視界の隅に捕らえた。

黒いＴシャツにメジャーリーグのキャップを目深に被っている男だった。が、斗馬はそれが誰なのか直ぐに気付いて、視界の中央で確認しようと顔を向けようとした。

その時、男は裕美子の両肩を強引に抱かかえ、突然の異変に驚いた彼女も短い悲鳴を上げる。

「克、やめろ！」

斗馬は叫びながら裕美子を掴もうと腕を伸ばした。克が何をしようとしているのかが判ったからだ。

……もつと早く気付くべきだった。どうして気付けなかった。

蘇えった彼らは、どんな理由かは知らないが潜在意識の中に強く残る身近だった人を殺し、そして……

そして、最後は自分も死ぬのだ。

何故だ……何故殺す。何故自殺する……？

いや違う。殺すのでも、自殺するわけもない。彼らは愛する者たちを向こうの世界へ導いているのだ。そして、自分も去ってゆく。

本来いるべき場所へ。

ただ、それだけだ……

……こいつらの魂は、おそらく本人そのモノだ。その理性や良心、道徳が現世とは異なるだけなのだ。

一瞬彼女の腕に触れたが、斗馬は裕美子を掴む事は出来なかった。裕美子の身体が克と一緒に宙に浮いた。高速度カメラで捉えたようなその瞬間、それはあまりにも幻想的なほど不可思議な光景だった。

地面の、いやホームのない場所に彼女の身体はあった。

後ろで巻き上げてまとめた彼女の黒髪が解け、吹き上げる風に長く舞っている。

微かに見えた克の顔は満面の笑みを浮かべていた。

これから愛するものたちと一緒に過ごせる、幸せの笑みに見えた。その一瞬は途方も無く長いものに思えた。しかしあつという間の出来事だ。

裕美子を抱えた克は、構内に侵入してきた先頭車両がけて線路に飛び込んだのだ。

反射的に斗馬は目を背けた。インパクトの瞬間を見る事はできない。

ドシャツ、という今まで聞いた事もない硬質で鈍い音と共に、肌の温もりに近い、生ぬるい飛沫しぶきが飛び散った。

ガタガタと音を立てて、斗馬の目の前を先頭車両が通過し、減速しているとは言え、急停車のままなら無い電車は、ワンテンポ遅れた状態で激しい金属音を響かせながら何十メートルも走ってからようやく制止した。

心臓は鼓動を速め、呼吸が苦しい。

沸き起こる雑踏、複数の悲鳴が轟いていたが、彼の耳には何も聞

こえなかった。

震える手で頬を拭くと、斗馬の手にはべっとりと紅い不透明な涙が付着していた。

裕美子の身体から飛び散った血痕が、涙と一緒に彼の頬を濡らしていたのだ。

* * *

テレビの天気予報で梅雨明け宣言が報じられていた。外は目が眩むほどの晴天に覆われて、陽の照り付けるアスファルトは白く光っていた。

斗馬は裕美子の葬儀には参列しなかった。

彼にはその必要が無かったのだ。

デジカメのメモリーカードをパソコンに差し込むと、裕美子のありったけの画像をそれに移動させる。

カードをデジカメに戻し、彼は静かに電源を入れた。

メモリーから彼女を呼び戻す為に。

「裕美子、早く戻って来てくれ……裕美子……」

斗馬は毎日デジカメの液晶画面に話しかけた。

直ぐに小さなシミが出来始め、5日目には朧気な裕美子の顔がデジカメの液晶画面で笑みを浮かべる。

そして今朝、ついに彼女はそこから消え去ったのだ。

もうすぐ彼女は戻って来る。

裏の旧家の庭からセミの声が響き渡り、眩い夏は本番を迎えていた。

宇津見斗馬の部屋のチャイムが、小気味よく、軽やかに鳴り響いた……

――了――

【最終話】メモリー（後書き）

最後まで読んでいただき有難う御座いました。身近にある道具を使った作品と言う関連テーマに基いて『めるトモ』に続き執筆いたしました。

冒頭の書き出し部分からラストへ繋がる手法もあえて同じ方法を取ってみました。お楽しみいただけたなら幸いです…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4493c/>

『メモリー』

2010年10月8日15時33分発行